

のんだことあるの？」。そうしたら「自分ではのんだことない」って。そんなこと言うもんだから、慶応が余計信用できなくなってる。

とにかく検査したら、心臓の隔壁のところにも二つ穴があいていて。今もあいてるんですけど、そのために脈が不整脈になって、思うように血が身体にまわらない。だから「手術したらどうですか」って言うんです。私、これで九回目の入院ですから、「手術したくありません」って言ったら、「手術した方が長生きできますよ」。「どのくらい長生きするんですか」と聞いたら、「九十から百」だと言ってます。「うちには百二才のがいますから、お断りしますが、手術しなかったらどうなるんですか」「八十まではいきるでしょう」「じゃー、それで結構です」と言ってる、手術せずに、七月七日に退院することになった。

すると、七月七日の午前四時半頃に左の胸が痛くなった。心臓だ。これはマズいな。言ったら退院できなくなる。黙ってしよう思った時に、携帯電話がなりました。家内からでした。

「おかあさん。亡くなりました」

死に目に会えなかった。でもねー、死に目にあえなくても母が起こしにきたんだなあー、と思っすよ。五月のさわやかな朝。母が調子がよかった時、調子がよいといつても脳梗塞で八年間寝たきりですから、話すこともできない。目も見えないけれど、苦勞して産んだ長男ことはちゃんと覚えてみるみたいで、私が声をかけると、私の方に手をさしだして、右手は麻痺しているの、左手で私の手をギュッとにぎっていた。そのましましばらく握っていた。私の知人の奥さんからこう言われたのを思い出していました。

「哲明さん。母親というのはね、最期は自分の息子に手を握ってほしいんだよ」

アノー、長女の人は気を悪くしないでくださいね。長女がだめっていうわけではないですよ。次男がだめっていうわけではなくて、特に長男に握ってほしいって、知人の奥さんはいっていただけですから。

その時に母は、口をばくばくあけてものを言っているのだけど言葉にならない。私の身体が弱いのを知っているから、「無理するんじゃない

ないよ」って言っていたかもしれない。

私は自分の病室で、家で亡くなつた母の訃報を聞きました。

私が退院した次の日がお通夜で、翌日が葬儀。その次の日がお施餓鬼でした。

お施餓鬼が終わったその日には講演があつて、新幹線で京都へ向かつていた。自分の病気で講演をキャンセルするわけにはいかないでしょう。いくつかの約束を果たして、再入院して出てきたのが、七月の末。

私の父は百二歳ですけれど、車いすにのつて「ずうっと続けてきたから。近くの喫茶店での辻説法に行く」っていうんです。「もう、やめておいたら」と言ったのですが、「行く」という。それが、最期まで布教していたという和尚としての勤めかな、と思つて止めませんでした。

さすがに二時間の説法で疲れたのでしよう。帰ってきたのが夜九時で、六時間後の朝三時に調子が悪くなつて、救急車で近くの病院にはいりました。入院した翌日の七月二十八日の夕刻に危篤状態になつてしまつて、家族全員が集めら

れた。

脈の状態がおかしくなつたらしく看護士さんが、それまで絶対に水は飲ませなかったのに、水をのませるんですね。死に水ですね。今日中に亡くなつてしまうのかな……。明治の人というのは強いですね。それから十二時間がんばりまして、いちばん可愛がつていた長女が岐阜に嫁いでいるものですから、彼女が枕もとにくるのを待つていたように、妹がたどり着いた二十九日の正午に百二歳のいのちを全うして去っていきました。

父が息をひきとり、遺骸の前で正受老人の詩を思い出していました。正受老人は、今日は詠まなかつたけれど、『白隠禪師坐禅和讃』の白隠禪師のお師匠様です。その正受老人がなくなる時に遺偈、サヨナラの詩を遺しております。こういう詩です。

末期の一句す

死は急にして、道（い）うことかたし

無言の言を言として

不道不道（いわじ いわじ）

訳してみます。

これから自分はさよならをしてい
なくてはいけないんだ。

みんなはのんびり考えているけれ
ど、死は突然にやってくるぞ。

死後のことは、いうことはできな
いんだ。

禅宗以外の宗教では、死んだら極
楽がある。死んだら地獄がある。

と、説きますけれど、禅宗では肉
体だけ滅びて、魂だけが極楽にい
くことはない。死んだ先のことは
言葉でいうこともできないし、指
し示すこともできない。そう、禅
宗は説きます。

私、正受老人のサヨナラの詩をそ
らで憶えていますから、父の遺骸
の前で、「そうか、不道不道（いわ
じ いわじ）の世界に入っってい
たんだなあ」。そう思いました。

死というものは、行ったこともな
いし、体験したこともないし、魂
も肉体も死んでしまっって説明もで
きないそういう宇宙。我々は、説
明もできない何にもない宇宙から
この世にたった一回だけ生まれて
きて、一回だけ生きて、死んでゆ
く。たった一回だけ死んでいく。
七月七日に母が亡くなって、その
二十二日後に父が亡くなって、ひ
と月の間に父と母を見送らなけれ

ばならないなんて、思いもしなか
ったです。

新聞の全国紙と各地方紙に「追悼」
「追想」という欄があります。一
頁に数人の方の追悼文が載るので
すが、八月二十一日か二十二日に、
松原泰道の記事が掲載されます。

その取材が昨日あった。共同通信
社が記事をつくって、各紙に配信
するんですね。取材にきたライタ
ーが私にいました。

「あなたのお父さまは、百二歳で
亡くなる前日まで、いや亡くなる
六時間前まで、どうして説法をし
ていたんですか。なんでそこまで
しなくてはいけないんですか」

理屈じゃないんですね。私を待
っていてくれる人がいると思えば、
病気なんかどうでもいいんです。
自分の生命なんかどうでもいいん
だ。私、言いました。

「あなた、今日風邪をひいたから
といって、このインタビューを休
むことができますか」

「休みません」

「これは、あなたの仕事でしょ。
あなたという身体を、仕事という
鎖でしばりあげているだけでしょ。
だれもあなたを縛りつけているわ
けではない。あなたは自分で解く

こともできるんだけど、解かない。そこですよ。ここが、大切なんだ」それでも、女性の記者はわからなかった。その記者は、寺にいて法事や葬式のお経をよんでいるのが、お寺の和尚さんだと思っていた。なのに、なぜ自分の生命を犠牲にして法をとかなくてはいけないんですか。いいじゃないですか。お寺にいてお経をあげるのもお坊さんの大事な仕事だ。しかし、もう一つ大切なことは、お釈迦さまのこした仏教の世界を、ひとりでも多くの人に伝えるのが松原の伝統だと僕は思っている。それは義務ではないです。記者が言いました。

「では、お尋ねします。泰道師と
いうのは哲明さんのライバルですか」
「ライバルじゃないですよ。同志ですよ。同じ衣を着て、頭を剃って、お釈迦さまのはなしをいかにやさしく説いていくかが、僕たちの役目なんですよ」
この通りに書いてくれて新聞記事になったのかどうか、数日後の新聞をみてください。

こんなことをやっている男だというのが、病院中にしれわたって、

診察を終えたお医者さんが私の病室にはいつてきて、聞きました。

「仏教とはなんですか」

私は病室のベッドから降りて、椅子にすわって、「仏教とはこういうもんですよ」と話をしました。そうしたら、ドクターが「今度お寺へ行つて、直接お話をうかがつてもいいですか」と言うから「どうぞ」と答えました。

そうして、一人でも二人でもいいから、仏教とまったく関係のない人が興味をもつてくれるというのがうれしいことだし、大きな意味でお釈迦さまにご恩返しができたんじゃないかなと思っています。

十一月九日に熊谷で、ピアノストの辻井伸行さんがコンサートをされますね。まだ、二十歳です。辻井伸行さんは目がご不自由で、見えません。私は病院で辻井伸行さんについて書かれた記事を読みました。記事としては下手くそです。それは、なぜか。辻井伸行さんのそのままの心を書いていないから。状況描写に終わっているから。

話は変わりますが、日光東照宮に左甚五郎の「みざる、いわざる、

きかざる」があります。

さきほど言いました。正受老人が「いわじ、いわじ」とサヨナラの詩でいった。いわないんだって。

いえないんだ。

坐禅中に口をききますか。無言でとおしますね。「いわざる」ですよ。坐禅中にキヨロキヨロともものを見ますか。「みざる」ですね。坐禅中に音楽をききますか。「きかざる」ですよ。そうやって自分の心を澄ましていくんです。

敢えて迎合するというならば、辻井さんは、話さないことで自分の心を澄ましきっている。これは禅でいうと、半分以上悟っている世界ですね。

澄みきった心になると、自分の心が四方八方にとんでいって、宇宙のどこにでも宿っていくことができるんだ、というのはブツダのもう一つのおしえです。心が澄みきっていくと、自分の奏でる音楽とか、描く絵が多くの人の心にすみついて、感動を与えていく。それが人間の最終的な生き方なんだ。というブツダのとらえた世界を、辻井さんは見事に奏でているんじゃないですか。

ある日、辻井伸行さんのお母さん

がショパンの『英雄ポロネーズ』のCDを聴きながら台所でご飯をつくっていた。襖をへだてたところでた、生後間もない伸行さんが両手両足をバタバタとさせて襖をたたいている。お母さんは毎日CDをかけた。かけすぎてCDに傷がついてしまったので銀座の山野楽器で新しいのを買ってきた。でも、新しいCDに伸行さんはまったく反応をしめさない。

「もしかして違う人が演奏しているからかしら」

「まさかあ、そんなことをこんなに幼い子どもがわかるはずがないじゃないか」

前のCDはピアニストが、スタニスラフ・ブーニン。後のものはサンソン・フランソワ。そこで、ブーニンのCDをもう一度買ってきて聴かせてみると、伸行くんは手足をバタバタさせる。

私は、その時すごいショックをうけました。仏法を説く。こうやっておはなしをするのにも、誰が説いてもみんなの心に染みわたるわけではない。その人の生きざまが、その人の願いが、お釈迦さまのおしえを知り抜いて、そのとおりに説教者が生きることができたとし

たら、ものすごい感動を与えるんじゃないかなあ。感動を与えないということは、話す側に力がないんだ。ということをつくづく知らされました。

伸行さんは神童ですね。それを、ちゃんとお父さんとお母さんが見ている、その子の伸びしろをもっと伸ばしてあげるのが親の使命じゃないのかなって、そう思いました。みんな伸びしろ持っているんですよ。

病院の中で何にもすることないから、本をひたすら読んでいました。若山牧水に、「草鞋よ」という詩があります。よんでみます。

草鞋よ／お前もいよいよ切れるか
／今日／昨日／一昨日／これで三日履いて来た

履上手の私と／出来のいいお前と
／二人して越えて来た／山川のあとをしのぶに／捨てられぬおもひもぞする／なつかしきこれの草鞋よ
『樹木とその葉・枯野の旅』若山牧水全集雄鶏社刊第7巻所収

考えてみればお互いに、生まれてきょうの今ままで、目に見えない草鞋を履いてきたわけですよ。

切れたからといって、捨てるわけにはいかない。切れても、引きづって生きていかなければいけないのかもしれない。

牧水は大正十一年晩秋、軽井沢から水上温泉へ旅をします。草津温泉から澤渡温泉へ降りていく途中、暮坂峠で草鞋がきれる。今まで一緒に歩いてきた草鞋だから、道ばたに捨てるわけにはいかない。そこで、「さよなら」と言って草むらにそっと置くのです。

緑りが繁り、今でも日中暗い暮坂峠に、この詩の詩碑がたっています。

こういう感動する旅の記録をこれからも皆さんにお伝えしたい。それが私の伸びしろかなと思っています。

熊谷は一年に一度くらいしか来ません。一昨年は40・9度というものすごい暑さの前日にまいりました。よく、こんな所で生きていくなと思います。でも、今日はずいぶん涼しくて、助かりました。でも、まだこれから本番の暑さが出てくるでしょうから、お身体お大事に、ご静聴ありがとうございます。おわりです。

施餓鬼法話「父母の死」松原哲明師

(平成十九年八月十五日に松岩寺
本堂で行われた松原哲明師の法話
の記録です。文責は松岩寺にあり
ます)

H19年8月15日 AM10:00～10:40 松岩寺本堂にて